

殺線虫剤による茶苗根腐れ防除効果について

誌名	茨城県病害虫研究会報
ISSN	03862739
著者	稲生, 稔 針谷, 信義
巻/号	4号
掲載ページ	p. 59-60
発行年月	1965年3月

殺線虫剤による茶苗根腐れ防除効果について

稲生稔・針谷信義

茶の挿木床において、線虫（ネグサレセンチュウ）及び土壤病菌による根腐現象が増加し、苗の活着を低下させ冬期に枯死株を多くするので殺線虫剤並びに土壤殺菌剤による床処理を行なつたのでその効果について報告する。

本試験実施に當つて協力を頂いた猿島地帯特産指導所、河原技師に対し深く感謝の意を表する。

1 試験方法

場所、猿島郡岩井町特産指導所苗床、品種やぶきた。挿木時期昭和36年6月15日、1区1m²区制、床は挿木後ビニール被履、

薬剤及び薬量、DBCP（1m²当）原液6CC、4CC、2CCを150倍にて灌注、EDBは1穴5CC、3CC深さ15cm千鳥30cm、ドロクロールは1穴3CC、深さ15cm千鳥30cm処理後ビニール被履、シミルトンは1,000倍液1m²当3ℓ灌注。処理時期は6月6日、ガス抜き6月13日、処理時地温16.5°C（地下10cm）、床土は火山灰土十赤土混合調査は昭和38年12月に生育、被害程度、線虫生息数及び活着率について行なつた。

2 試験結果

薬剤処理による茶苗生育と被害状況調査

薬剤名及び処理量	調査本数	根長	寄生指数	線虫生息数（匹）	活着率
ドロクリール 3CC	37 ^本	14.9 ^{cm}	2.7	0	90.0%
EDB 3CC	35	19.1	14.3	4	82.5
EDB 5CC	40	17.8	9.2	0	95.0
DBCP 6CC	34	18.0	2.9	2	80.0
DBCP 4CC	38	16.0	53.4	2	95.0
DBCP 2CC	39	15.7	8.1	0	97.5
DBCP 2CC+シミルトン	33	17.7	4.4	0	92.5
シミルトン	36	18.5	16.7	0	92.5
無処理	36	15.5	37.4	12	100

（注）成績は2区平均、線虫数は土壤30g処理

寄生指数は線虫研究指針を参考にした。

茶苗挿木前に殺線虫剤並びに土壤殺菌剤の処理を行なった結果は表のとおりである。各薬剤処理とも無処理に比較して効果が認められ、生育は良好、特に根長においてはD B C p 6 C C 処理が優れていた。根部の被害状況ではドロール3 C C 及びD B C p 6 C C 処理が発病少なく次いでp B C p 2 C C +シミルトン1.000倍処理の頃であつた。シミルトンの単剤処理及びE D Bではやや劣る結果を示した。線虫生息数は採集時期が1.0月であつたため極めて少なく無処理区がわずかに生息を認めた。また活着状況は無処理が最も高く、処理区には差が見られなかつた。

以上の結果から、茶苗床の土壤処理は殺線虫剤D B C p 6 C C 処理が生育、根長とも好結果を示したが、活着がやや劣る様に思われる。ドクロールでは被害(根の褐変)を少なくするが、初期に薬害を生じやすい(ガス抜きが早い)ので注意が必要、またシミルトンでは単剤処理で発病やや多く、D B C p 剤の混用で少なくなつた。なお土壤病菌はピチウムが多く分離された。

(茨城農試病虫部)